
ウルトラマンタロウA's

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンタロウA・S

【Nコード】

N4144Y

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

闇の書の戦いの最中フェイトが訪れたのは幻想の平和ではなく。

ウルトラの世界だった。

第一話 光の戦士の元へ（前書き）

いつもの逆パターンに挑戦しました。

第一話 光の戦士の元へ

第一話 光の戦士の元へ

海鳴の町

闇夜に満たされた世界。

今其処では闇の書との決戦を控えているのだった。

「うわ!!」

「く!!」

闇の書の攻撃を受けながら触手に絡まれるのはとフェイト。

闇の書の中の親友を救うべく戦いを繰り広げていた。

そしてその様子を大空の彼方から赤い炎の玉が見ていた。

「この駄々っ子!!」

フェイトがバルディッシュで斬りかかろうとしたその時だった。

「お前も・・・我内で・・・眠るといい・・・」

「えー!!」

するとフェイトの身体が透け始めた。

(・・・消える・・・私・・・消えるんだ・・・)

死を覚悟しそう呟くフェイト。

(・・・闇には勝てないのかな・・・光・・・)

その時だった。

(・・・光・・・)

消滅し闇の書の体内に入る瞬間。

闇の空から降ってきた赤い炎の玉がフェイトの身を包み込んだ。

「なに?・・・!!」

目を覚ますと闇の異空間に浮いているフェイト。

フェイトの目の前には赤い巨人が立っている。

「あなたは・・・誰?」

『僕は・・・獅子座L77星の宇宙人・・・』

「宇宙人？」

フェイトの言葉に頷く赤い巨人はフェイトに向かって指差すとフェイトの右手の薬指に指輪が巻きつけられた。

『僕は君の勇気に感動した・・・だから僕の命を君に上げよう』

「え？」

自分の命を受けると言う巨人の言葉に疑問を感じるフェイト。

『・・・君は僕と一心共同体になる・・・その指輪が証拠だ・・・だが今の君には使いこなすことが出来ない・・・』

「どうすればいいの？」

『今次元の扉が開いた・・・この先にいる光の戦士に会った・・・彼なら君を導ける』

巨人がそう呟きながら闇の書の中に世界の道を指し示した。

「あなたの名前は？」

『・・・僕の名はアストラ』

アストラの名を聞いた瞬間・フェイトの体が光に導かれた。

(お……り……ろ……い……)

「ん？」

朦朧とした意識のフェイトは誰かに呼ばれている気がして目を覚ましてみた。

「おい！しっかりしろ！！」

「ん？……え？」

フェイトに必死に呼びかけていたのは青と赤の制服に身を包んだ青年だった。

「しっかりしろ！……良かった……気付いたみたいだね」

「ここは？」

フェイトが目を覚めたのは何処かの海岸であった。

「こちら東！本部応答してください！少女の保護を！！応答願います！」

「??？」

東と名乗る隊員の言葉にパニックになるフェイト。

（こんな組織の人居たっけ？）

「何処から来たのか覚えているかい？」

「えっと・・・海鳴・・・」

「海鳴？そんな町は無いぞ？」

「え？」

海鳴の町の存在その物を知らないというフェイトに東は・・・

「どうやら・・・訳有りみたいだね・・・よし！いったん本部で事情を聞こう」

「え？信じてくれるんですか？」

「ああ。嘘をついている目にはとても見えないからね」

人に信じてもらえることに喜びを感じるフェイト。

「あ・・・ありがとう・・・」

「よし！それじゃあ！行こうか！俺は東光太郎」

「はい。私はフェイト・テストロッサ」

こうしてフェイトは光太郎達ZATの基地まで案内されることになった。

第一話 光の戦士の元へ（後書き）

激しい雷鳴と稲妻の中に大怪獣コスモリキットの咆哮

ひた走るウルフフフ

ZATと二大怪獣の死闘

ライブキングの胃袋の中に囚われ翻弄される光太郎とフェイトのピンチ

その時！ウルトラの星から地球に向かうウルトラの母

さあ！次回のウルトラマンタロウ！皆で見よう！

第二話 その時ウルトラの母は

第二話 その時ウルトラの母は

ZAT本部に案内されたフェイトは隊員達に事情を説明していた。

「ふむ・・・にわかには信じがたい話だがね・・・」

朝日奈隊長がフェイトの話を聞いて考えている。フェイトの話を否定しているわけではないが冷静に状況を分析しているのだ。

「けどな、外国から来た迷子かもしれないし・・・第一宇宙人の変装じゃ」

「いや・・・彼女は宇宙人じゃないよ」

南原の言葉を北島が否定した。

「まあまあ・・・はい！みんな」

「おお！すまないね」

森山が場を和ませようと隊員達にジュースを配り始めた。

「はい。フェイトちゃん」

「あ・・・どうも」

「子供なんだからそんなに遠慮しないの」

森山の言葉に拍子抜けするフェイト。

（え？この人たちが私を普通の子どもとしてみてるの？）

ミッドチルダではフェイトの認識は魔導師といわれつきとした存在を確立しているがこの大人達からすればただの子供でしかないらしい。

「隊長・彼女の持っている・・・デバイスですか？調べてきたところとてもじゃないですがこの世界では作れませんね」

「うむ・・・では信じるしかないようだな」

朝日奈隊長がフェイトを次元世界の迷子として認識したのだった。

「どうするんですか？彼女の下宿は」

「見ず知らずの世界に着たんです・・・施設に預けるのはとても」

新垣の言葉に西田も同意した。

しかし

「いえ・・・私なら気にしないでください・・・施設に・・・もし良かったらこの世界の空き部屋にでも」

フェイトの自分のことは放っておいてくれと言わんばかりの態度を見た朝日奈隊長は・・・

「そうだなあ・・・あ！ところで・・・昨日カレー食ったもん居るか？」

突然の振りに・・・

「え？・・・はい」

光太郎が手を上げた。朝日奈隊長はにんまりと笑い。

「よし！俺も昨日カレーを食べた！というわけで！彼女は東の下宿で保護してもらおう」

「そいつは良いや！東の家ならさおりさんが居るし。同い年くらいで健一君がいるじゃないか！」

朝日奈隊長の発案を南原が肯定する。

するとフェイトが・・・

「あ・・・いや・・・私ならお構いなく・・・施設のほうへ・・・」

遠慮してしまう。見ず知らずの人には迷惑がかけられないと思ったのだ。

だが

「何言ってるんだよ。変な気を使わなくて良いよ。さおりさんには俺が話をするから・・・遠慮しないでおいでよ」

光太郎の言葉にフェイトは頷くしかなかった。

「フェイト君・・・安心したまえ・・・君のことは我々ZATが責任を持って保護する」

「あ・ありがとうございます」

正直人に頼ることのできなかったフェイトが人に頼れる瞬間に戸惑ってしまうのだった。

「それじゃあ・・・さっそくメンバーを紹介しようか・・・副隊長の新垣君」

「よろしく」

「北島君に南原君」

「どうも」

「オッス」

「西田君にアシスタントの森山君だ」

「よろしく」

「よろしくね」フェイトちゃん

ZATの面々に笑顔で迎え入れられフェイトは益々かしこまってしまうのだった。

そしてフェイトが提案した。

「あの・・・光太郎さん・・・」

「ん？」

「ZATは怪獣退治の専門家なんですよね？」

「そうだけど・・・どうしたんだい？」

「その・・・私の力を・・・使ってください」

「え？」

「私には攻撃魔法があります・・・もしかしたら私がここに来たのは・・・戦う力があるから・・・だから」

「ダメだ」

「え？」

「力があるから・・・ただそれだけの理由で戦うというのなら君を戦わせるわけにはいかない」

「どうして？」

「力があるだけが戦うことに必要なことじゃないんだ・・・それに

君がこの世界に来たのは・・・戦うために着たんじゃないかかもしれないか」

「・・・・・・・・」

光太郎の難しい言葉に考え込むフェイトだった。

白鳥家

「いらつしゃい」光太郎さんから話は聞いたわ」

さおりが光太郎に連れられてきたフェイトを迎え入れた。

「自分家だと思ってかまわないわよ」

「あ・・・その・・・ありがとうございます」

さおりにお辞儀するフェイト。

そこに

「ただ今」

学校から帰ってきた健一。

「健一！あいさつ！」

「はい！」

学校から帰ってきた健一をさおりが叱ると健一はフェイトに挨拶をした。

「あ！この子が光太郎さんが言ってた別世界の迷子？」

「あ・・フェイト・テストロッサです」

「凄いな、魔法の世界か、行ってみたいな」

フェイトの世界に思いをはせる健一。

翌日

「シュ！シュ！」

豪雨の中ボクシングジムで練習に没頭する光太郎と見学に来た健一とフェイト。

「頑張れ！光太郎さん！」

「頑張ってください！」

健一とフェイトの応援の中光太郎のスパarringが架橋になり。

「うわ！」

殴り飛ばされる光太郎。

「ちきしょう・・・」

殴り倒されながらも立ち上がろうとする光太郎。

「いやゝ東君！君の根性には感心するよ」

ボクシングジムの会長にほめられるが正直悔しくて聞いていない。

「くそ・・・今度こそ俺が勝つと思ったのに」

タオルで顔を拭く光太郎に健一とフェイトが・・・

「光太郎さん・・・」

「もう止めたら？」

「何言ってるんだ。君たちと約束したじゃないか。俺は・・・約束は必ず守るんだ」

光太郎の言葉に健一はすね始めると・・・

「さあ！拳万だ！」

「うん・・・」

「・・・はい」

光太郎は健一とフェイトに次は必ず勝つと約束しトレーニングに没頭した。

翌日

「はいフェイトちゃん」

「これ・・・」

さおりからランドセルを貰うフェイト。

「折角この世界に着たんだもの・・・学校の手続きはとっておいたわ」

「フェイトちゃんも学校に来るの？」

嬉しそうな健一にフェイトはタジタジになる。

そして学校帰り

「はあ・・・緊張したなあ・・・」

「そう？」

赤いランドセルを背負いながら緊張するフェイト。留学生という設

定で入学した為受け入れてもらえるかが心配だった。

「じゃあ！行つてきます！」

「いつてらっしゃい」

さおりに送り出されながら健一とフェイトは川の周辺にある何でも食べる穴という場所に行った。

「これはそう？」

「うん・・・えい！」

フェイトが穴を覗いているとき健一がポップコーンを落としてみると帰ってこないポップコーンそして。

「よおっし！えい！！」

袋ごと健一が投げ込んでみると袋だけが帰ってきてポップコーンは無くなってしまった。

「不思議だね」

「そうだね」

不思議そうに穴を覗きこむ健一とフェイトすると

「おい健一君！フェイトちゃん！」

「あ！光太郎さん！」

ロードワークの途中の光太郎が通りかかると健一が事情を説明し始める。

そしてフェイトが・・・

「え？」

何かを感じ取った。

今までの自分には無い超感覚がフェイトの耳に何かの音を捉えている。

「なんなのこれ？・・・一体・・・私・・・どうなっちゃったの？」

パニックに陥り警告している何かを感じ取れないフェイト。

「どうしたのフェイトちゃん？」

心配そうにフェイトの顔を覗き込む健一にフェイトは笑って答えた。

「健一君・・・それが・・・あれ？光太郎さんは？」

「あ！ZAT本部に行つたよ」

「そっか・・・帰ろう」

「本当に大丈夫？」

「うん！心配してくれてありがとう」

その夜

（・・・私・・・どうなっちゃったんだろう）

白鳥家の貰った部屋で布団で横になりながら考え込むフェイト。

（・・・あの感覚普通じゃなかった・・・まるで自分とは違うもう一人の自分の感覚みたい・・・）

この世界に来る前のアストラの言葉を思い出すフェイト。

（君は僕と一心同体になる）

「・・・・・・・・・・」

右手に付けている指輪を見ながらフェイトは物思いに老け就寝するのであった。

翌日

「健一君？」

白鳥家でフェイトが何かに気付くと健一とさおりが喧嘩し健一が部屋に閉じこもってしまったのだ。

「健一君？どうしたの？」

「フェイトちゃんだって僕の事信じないんだ！？」

「え？」

取り付く島のない健一に一步引いてしまうフェイトに光太郎が部屋に入ってきた。

「そりゃゝ無いんじゃないか？健一君。いくらなんでもフェイトちゃんに当たること無いじゃないか・・・何があつたんだい？俺に話してごらんよ」

「光太郎さんもうせ信じやしないよ！！」

「おい健一君そりゃないぜ。俺はまだ何も聞いてないぜ？何があつたんだ？・・・ん？」

健一が机の上で描いた絵を見る光太郎。

「健一君・・・この怪獣何処で見たんだ？」

「え？」

「俺が昨日見たのと同じだぞ」

「光太郎さんも見たの！？」

健一と光太郎のやり取りについていけないフェイトは話を聞いてみた。健一が川に行った時突然地響きが起けると怪獣が現われ釣り人

が食べられてしまったのだ。

「・・・そんな・・・」

人が怪獣に食べられるというショッキングな場面に遭遇した健一の痛みを感じるフェイト。そして健一が拾ってきた弾に光太郎は・・・

「間違いない・・・この弾は俺が怪獣に向けて発射したものだ！！・・・健一君！大手柄だぞ！！俺はすぐZATに知らせなくっちゃ！！」

健一の情報を元に光太郎がZAT本部で事情を説明した。

「ふむ・・・確かに子どもが上流から拾ってきたとは考えにくいな・・・むしろ怪獣にくつついてきたと考えるべきだろうな」

朝日奈隊長の言葉に南原は・・・

「くそー！あの時もつとよく調べていればなあ」

「またか」

「すいません」

南原が反省するが朝日奈隊長に突っ込みを入れられてしまう。

直ちに怪獣誘き出し作戦が考案された。川にいたと思われる怪獣をどうやって誘き出すか。カレーやおにぎりを食べながら柔軟なアイデアを考えるZAT隊員。

すると西田が・・・

「川に電気を流せばいいんですよ！」

「そうか！西田の得意な放電作戦か！」

「いやそれほどでも」

照れる西田。

「よし・・・生物は電気ショックに反応する」

朝日奈隊長の指示で作戦が開始された。

川に電磁石を落とし朝日奈隊長は上空のコンドルで待機している。

「作戦開始！」

川に電流が流されると辺りが光り始め川から怪獣コスモリキッドが現われた。

「攻撃開始！！」

ZATガンでコスモリキッドを攻撃するZAT隊員たち。

「！！！」

南原がスーパーナパームをお見舞いするが怪獣に効果が無い。

「うわ！！何で俺のところに来るんだよ！！！」

コスモリキッドに攻撃される北島。北島が木にしがみつくとコスモリキッドは北島を舐め食べようとする。

「ひゃあああ!!」

「北島さん!!」

西田が北島救出に駆け出していった。

「西田! 戻るんだ西田!!」

光太郎の言葉を聞かずに北島を救出するべく西田が必死にZATガ
ンで攻撃するがツイニコスモリキッドは西田に標的を変えた。

「うああ!!」

西田がコスモリキッドに踏み潰されそうなその時。光太郎のウルトラ
バッジが光った。

「よし! ウルトラマンタロウになるときが着たぞ!!...!!」

光太郎がウルトラバッジを掲げた瞬間球からウルトラマンタロウが
飛び出した。

『...』

・ コスモリキッドに向かって構えるタロウ。それを見たフェイトは...

「あれは!!」

タロウの姿にアストラを重ねた。そしてフェイトの右手の薬指にあるアストラの指輪が淡い輝きを放っている。

「あれが・・・アストラの言ってた・・・光の戦士・・・」

身体に駆け巡っている感覚に誘われフェイトが現場に来てしまった。

『デアアア!!』

北島と西田を救出し地上に下ろした。

「よし!逃がすな!!」

北島の応援にタロウが空中を飛ぶと回転し得意技スワローキックが炸裂した。

そのままタロウのパンチが炸裂する怯むコスモリキッド。

コスモリキッドは液体化し川に逃げ込もうとするがタロウによって阻止され近くにあった穴にはまってしまふ。

その穴は健一とフェイトが言っていた何でも食べる穴であった。

コスモリキッドが動けなくなったのを見たタロウはコンドルを見て攻撃指示を出した。

朝日奈隊長がコンドルからミサイルを発射するとタロウは左腕を出した。

『ブレスレット・・・ランサー!!』

ブレスレットランサーを投げるとコスモリキッドに突き刺さり沈黙しながら何でも食べる穴に吸い込まれていったコスモリキッド。

『シユア!』

ウルトラマンタロウが大空に飛んでいくとフェイトの中の感覚が消えた。

「何だったの・・・あれは・・・」

フェイトは自分の中にもう一人の誰かがウルトラマンタロウに反応した感覚に襲われていた。

戦いが終わり光太郎が何でも食べる穴を見つめていた。

「おい!東!大丈夫か!？」

「ええ・・・この穴・・・なんでも食べる穴って子供達の間で有名なんです」

新垣達が穴を覗きこむ。

「へえゝまるで新垣さんの胃袋みたいだ」

「なんでも食べるから大きく丈夫になるんだ。南原みたいに無差別じゃないぞ」

「ああ、それでアンパンみたいに膨らんでるんですか？」

西田が新垣のお腹に触ると起立し帰島するZATのメンバー。

翌日

「しゅ！しゅ！..」

川原でロードワークしている光太郎・健一・フェイト・ポチ。

「光太郎さん！これだけ練習すれば・・・」

「ああ！君達との約束は必ず守るさ」

「絶対ですよ」

健一とフェイトに応援され光太郎はファイトを燃やすが・・・

「アンアン！！」

「ん？ポチ！」

ポチが土手を降りると何でも食べる穴に入ってしまった。それを見た健一とフェイトはすぐさま後を追った。

「ポチー！」

健一とフェイトが何でも食べる穴に駆け寄ると光太郎が止めた。

「待て健一君！フェイトちゃん！様子がおかしい・・・」

慎重に行動しようとしたその時。

「うわあああ！！！」

「きゃあ！！」

地響きと共に穴に落ちてしまう光太郎とフェイト。

「うわあああ！！！！」

「あああああ！！」

何やらブヨブヨした空間に引き摺り込まれると何やら弾んでいる。

「あ！ポチ！！」

フェイトが空間でポチを見つけると周囲を搜索したいが暗い。

そしてそのまま地面から怪獣・ライブキングが現われた。

外では健一がZATを呼び出しX線装置を作動させていた。

「この動いているのが東か・・・」

「間違いない！東さんですよ！・・・それでこっちがフェイトちゃん」

新垣・西田が怪獣の胃袋の中の光太郎とフェイトを捉えると・・・

「ああ・・・何とか連絡取れないですかね？」

西田の言葉に新垣がヘルメットの通信機を起動させると体内の光太郎に通信が入った。

「副隊長！俺は一体どうなってるんですか！？」

「落ち着け！お前は今怪獣の腹の中に居るんだ」

「怪獣！ちくしょう！！えいえい！！」

ライブキングの胃袋の中で攻撃する光太郎。

そしてフェイトは・・・

「怪獣の胃袋の中・・・という事は・・・私このまま消化されて怪獣の栄養になっちゃうんだ・・・」

想像してみても絶望するフェイト。

尚、光太郎の攻撃を受けながらライブキングが暴れ始めている。

「おい！東！中で手荒な事はするな！！」

「冗談じゃありませんよ！俺たちより前に飲まれた人間はもう消化されちゃったんですよ！！」

白骨化した骸骨を見つけてしまう光太郎とフェイト。

「副隊長・・・奴は昨日の怪獣も飲み込んでます・・・きっと消化不良を起こしてるんでしょう」

「消化の悪い怪獣なんて飲み込むから・・・」

「だったら下剤飲ませれば良いじゃないですか？」

「人間の何千倍飲ませれば効果があるんだ？第一どうやって飲ませるんだ？」

各自光太郎とフェイトの救出に四苦八苦しているZAT。このままでは二人とも消化されてしまう。

そして

「高圧パイプ作戦だ！！コンドルを使い！」

新垣の指示でコンドルに乗った西田がライブキングの腹に高圧パイプを打ち込むと凄まじい量の液体が噴射された。このままいけば内容物と一緒に光太郎とフェイト・ポチが吐き出される。

「よし！良いぞー！」

作戦がうまくいったと思いきや・・・

『ウエハハハハハハ！！』

不気味な声と共にライブキングは腹に突き刺さったパイプを引っこ

抜いてしまった。

「しまった!!」

パイプが引っこ抜かれた瞬間自体は悪化した。

『ギシャアアアアアア!!』

なんと高圧パイプによって昨夜飲み込んだコスモリキッドが消化されず実体化したのだ。

ZAT本部

「ななななな!なんてしぶとい奴だ!」

慌てふためく朝日奈隊長。

「森山君お茶お茶」

「あ!はい」

「いや!水で良いや!」

「水そこにあります」

森山に指さされ水を飲み干す朝日奈隊長。

健一が光太郎・フェイト・ポチを救出する為にラジコンジェットを飛ばしてみるが効果は無い。

一方光太郎とフェイトは今にも消化されようとしていた。

「くそ！俺には健一君とフェイトちゃんとの約束があるんだ！！」

諦めない光太郎と・・・

「く！」

何も考えられないフェイト。

その時フェイトの指輪が淡い輝きを放ち始めている。

そして地球に向かう影が・・・

それこそウルトラの母だった。

第二話 その時ウルトラの母は（後書き）

二代怪獣に襲われたピンチ！

ライブキングの胃袋にとらわれた光太郎とフェイトの救出にZAT
の決死の作業が続く！

スカイホエール！コンドルが飛ぶ！

さおりが危ない！健一が危ない！

ウルトラマンタロウの絶体絶命のピンチを救う者は誰だ！？

その時フェイトの秘められた力が！

さあ！次回のウルトラマンタロウA's ウルトラの母はいつまでも

皆で見よう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4144y/>

ウルトラマンタロウA's

2011年12月3日22時46分発行